「筆一貫」
郷土を愛した日本画家

及川豪鳳

及川豪鳳は、本名を及川一といい、一八九四年（明治二七年）及川直康・よしえの長男として、旧江刺郡岩谷堂中町（現・江刺区中町）に生まれた。

父の直康が日本画を描いていた影響もあって、幼いころから絵や書にその才能を表し、画業の道に進むことを希望するようになった。

しかし、父母の願いは、商人にすることであった。絵では生活できないことを身をもって知っていた父は、何とか絵の道をあきらめさせようと豪鳳を小屋に閉じこめたこともあった。しかし、泣きながらも何かを描こうとする息子の姿を見て仕方なく許したという。

豪鳳は、一九一四年（大正三年）一九歳のとき、有名な画家になる夢を持って東京に行き、東京芸術大学日本画科の前身である川端画学校（川端玉章が東京の小石川に創立）に入学した。学校の庭にはたくさんの植物があり、鳥や動物が飼われていた。画学生は、それらの写生に明けくれる毎日であったという。

当時の豪鳳は、いなか者と見下されたり、一日の食事が腐りかけたリンゴ一個のみだったりと、大変な苦労をしながらも、精力的に画業を修めていた。

しかし、一九一六年（大正五年）三月に母が、続いて九月に父が病死するという相次ぐ不運に見舞われた。すぐにも故郷にもどらなければならない状況であったが、豪鳳の絵に理解を示していた母方のおじ菅原権五郎が弟と妹のめんどうを見てくれるとともに、経済的な援助をしてくれたおかげで学業を続けることができた。

豪鳳は、優秀な成績で学校を卒業した。卒業作品の植物の写生は、「甲上」という最高の評価を受けた。師匠の川端玉章から息子の「玉雪」の一字をもらい本名の「一」と合わせて「一雪」とするように言われたが、自分であえて「豪鳳」と名づけた。このことからも、中央で活躍できるという自信を持っていたことがうかがわれる。

ところが、卒業した翌年の一九一九年（大正八年）最大の援助者であったおじの権五郎が急死した。将来を有望視され、師匠からは「東京にとどまって画家として大成するように」と言われたが、長男として弟妹のことを心配し、故郷の岩谷堂に帰ることとなった。

その翌年、岩谷堂南町の半沢チヨと結婚し、一男二女が生まれたが、画家の仕事だけで生計をたてられるはずはなく、大変苦しい生

活であった。

豪鳳は、四条派（文人画派の一つ、円山応挙系）の伝統を継ぐ非常に優秀な画家であったが「人に頼まれたものなら何でもかく」といって、鹿踊りの背中の流し絵、商店の売り出しのポスターやお菓子屋の代表商品紹介の絵、看板、観光パンフレットの表紙の絵など、様々なものを描いている。

本格的な画は、掛け物・襖絵が中心で、画題は花鳥が得意であったが、唐美人も多く描いている。特にも、「樹下美人」の絵は豪快なタッチで樹木を描く一方で、女性の髪の毛についてはよく気をつけて見ないと見逃すほど、一本一本繊細な筆づかいで描いている。

現在残っている代表的な作品を数えると、仏画の大作が多いことに気づく。チヨ夫人の手記によると、一九四四年（昭和一九年）長男の戦死の報を機に、美人画・花鳥画から、仏画や墨絵の山水画が多くなっていったという。

代表作としては、水沢区正法寺襖絵「鳳凰図」、江刺区光明寺襖絵「寒山拾得図」、江刺区松岩寺「阿弥陀三尊図」、平泉毛越寺金光院「釈迦三尊」、前沢区千田家襖絵「花鳥図」等々があるが、奥州市内の寺院や個人宅にはたくさんの作品が保存されている。

後年、豪鳳は自宅を開放して、町内の子ども達を対象に書道塾を開いている。「塾」と言っても決して堅苦しいのが目的ではなかった。「いろいろな習い事に通える子はともかく、それができずにいる子が『あばれんぼう』的に遊んでばかりでは明日のためにならない。何かを習うということで意欲と自信がわき、情操的にも役立つ」との考えから始めたものだったという。だから、級も段もなく、みんな同じ「◎」と「優」だけで終始した。塾での豪鳳は、字を書くことだけでなく、言葉の意味や行儀についてもやかましく言ったので「習字を習いにきているのか、叱られにきているのか分からない。」とぼやいた子がいたほどである。

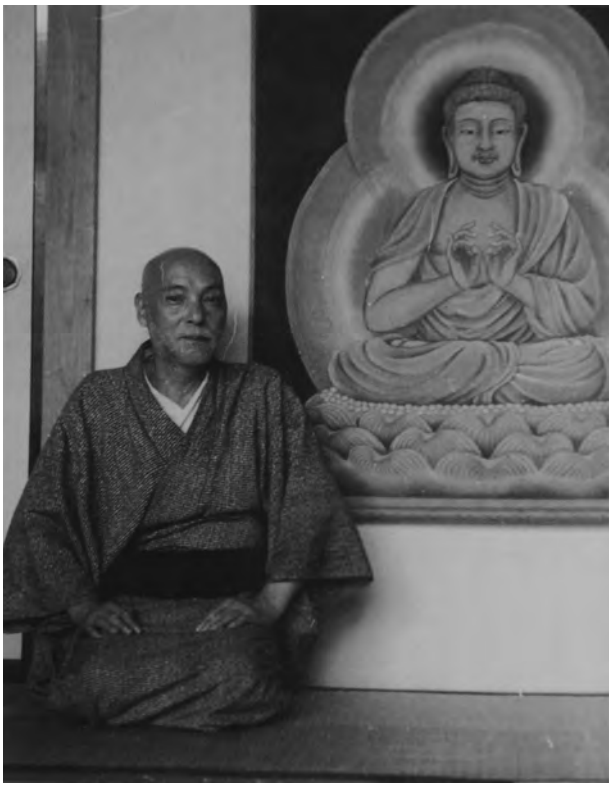
塾生は、多い時には七十人を超えるほどだったが、父母から「いくら納めればいいか困るから、月謝を決めてくれ」という声があっても、豪鳳は「気もちだけでいいのだから」と最後まで月謝の額を決めることはなかった。月謝を定めることによって塾に通えなくなる子のことを考えていたようである。

豪鳳は、「地方では日本画だけで生計をたてるのは無理」という自分の経験から、一切日本画の弟子をとることはなかった。息子にもそれを望まず、師範学校に進ませ、二人の娘にも同様に美術については一切伝えることはしなかった。そのため、豪鳳の名前は、地元以外ではほとんど知られることがなかった。「名もなく、貧しく、

美しく」を地で行くような人生を送った豪鳳であったが、一九七〇年（昭和四五年）四月二九日、病の床の中で「筆一貫」の書を残し、静かにこの世を去ったのである。

＊参考文献

「筆一貫」追想-及川豪鳳　　及川デザイン室発行



完成した仏画の前の豪鳳。
（北上市の安楽寺にて、昭和33年）